

泉鏡花

蓑谷

正規表現版・藪野直史オリジナル注附

「やぶちゃん注」本篇は明治二九（一八九六）年七月発行の『少年世界』初出で、鏡花数え二十四歳の時の作品である。後の明治三十六年一月春陽堂刊の作品集「田毎かどみ」に、又、大正七（一九一八）年六月文武堂から刊行された「鏡花隨筆」に収録された。

底本は岩波旧全集（巻十・一九四〇年刊）に拠った。但し、加工データとして嘗つて大變お世話になった（[私の鏡花の俳句集のこちらのものは](#)）、サイト主が贈って下さったものである）サイト「鏡花花鏡」で公開されていたもの（記憶では春陽堂版全集底本で、ルビに相違があるようであり、本文の異同もありそうである）を、概ね、使用させて戴いた。ここに御礼申し上げる。

踊り字「く」「ぐ」は生理的に嫌いなので、正字化或いは「々」したが、その外の表示表記はルビに至るまでそのまま再現してある。

偏愛の掌篇なれば、最後に私の感想的な批評注を置いた。」

蓑谷

見るから膚の粟立ツばかり涼しげなる瀑に面して、背を此方に向けたるは、惟ふに彼の怪しの姫なるべし。

蓑谷の螢には主ありて、みだりに人の狩るをゆるし給はず。主といふは美しき女神にておはすよし、母のつねに語り給ひぬ。

谷をのぼれば丘にして、舊城のありたるあとなり。下は一面の廣野にて、笹川といふ小川其あひだを横ぎり流る。

はじめは其廣野にて、ともだちと連れなりしが、螢一ツ追ひかけて、うかうかと迷ひ來つ。

野に居たりし時ハヤ人顔の懐しきまで黄昏れたりしを、樹立彌が上に生茂りて、空の色も見えわかざる、谷の色は暗かりき。

地も、岩も、木も草も、冷き水の匂ひして、肩胸のあたり打しめり、身を動かす毎にかさかさとして鳴るは、幾年か積れる朽葉の、なほ土にもならであるなり。

瀑は樹と樹の茂り累なる梢より落つと見えぬ。半ばより岩にかゝりて三段になりて流る。左の方に小さき堂あり。横縦に蔦かづらのからみたるを、犇と封じて鎖を下せり。岩にせかるゝ瀑の雫、颯と其堂の屋根に灌ぎ、朽目を洩れて、地の上に滴りたり。傍に一尺より二尺までの大きな地藏尊、右の方を頭となし、次は次より次第に小さきが、一ならびに七體ぞ立たせ給ふ。たゞ瀑のみならず、岩よりも土よりも水とどこどころ湧き出づれば、此處彼處に溜りたる清水溢れて、小石のあはひを枝うちつゝ、白き蛇のひらめくやう、低きに就きて流るゝ音、ものゝ囁くに異らざるを、鬱蒼たる樹立の枝を組みて、茂深く包みたれば、きく耳には恰も御佛達その腹の中にて、ものをいふらむ響す。

かゝる處に、身に添へる影もなくして唯一人立ちたる婦人の、髪も見馴れざる結方なり。黄昏の色と際立ちて、領の色白くあざやかに、曙の蒼き色の、いと薄き衣着たまへる、

ふみそろへたる足のあたりは、くらき色に蔽はれて、淡き煙、其帯して膨かなる胸を籠め、肩のあたりのさやかに見えて、すらりと立てる瘦がたの身丈よく、ならびたる七つの地藏の最も高きものゝ頭さへ、やうやく其胸に達するのみ、これを彼の女神ならずと誰か見るべき。

予が追來たりたる一ツの螢の、さきよりしばし木隠れて、夕の色に紛れしが、蒼き光明かに、彼の小さき堂の屋根に顯れつ。横さまに低く流るゝ如く、地藏の頤のあたりを掠めて、うるはしき姫の後姿の背の半ばに留まりぬ。

「あゝ、」姫なる神よ、其螢たまはずやといはむとせし、其言いまだ口を出でざるに、彼の君あわたゞしう此方を見向き、小さき予が姿を透し見さま、驚きたる状して、一足衝とすきるとて、瀑を其頭にあびたり。

左右の肩に颯と音して、玉の簾ゆらゆらとぞ全身を包みたる。

「螢、下さいな、螢下さいな。」

と予は恐氣もなく前に進みぬ。

螢は彼の君の脇を潜りて、いま袖裏より這ひ出でつゝ、徐に其襟を這ふ時、青き光ひたひたと、ぬれまとうたる衣を通して、眞白き乳房すきて見えたり。

鼻高う、眉あざやかに、雪の如き顔の、やゝおもながなるが、此方を瞻りたまへば、「ねえ、螢一ツ下さいな。母様は然ういッたけれど。あの、神様が大事にして居るんだから取ツちやいけないッて、さういつたけれど欲いんだもの、一ツ位いゝでせう。」

と甘ゆる如くいひかけつゝ、姫の身近に立寄るに、彼の君はなほものいはで、予が顔を瞻めたまふ。目の色の見ゆるまで、螢の光凄く冴えたり。予は少しく恐氣立ちぬ。其姿の優しければこそ、來るまじき處に來て、神の稜威を犯せしを、罪したまはばいかにせむと、いまは其あまり氣高きが恐しくて、予は心細くも悲しくなりぬ。

あとへあとへと退さりながら、

「御免なさい、御免なさい、こんだツから來ないから。あれ、うちへ歸して下さいよう。もうもう螢なんか取らないから、御免よ御免よ。」とぞわびたりける。

姫が顔の色やゝ解けて、眉のび、唇ゆるみぬ。肩寒げに垂れたる手を、たゆたげに胸のあたりに上げて、

「これかえ。」

といひながら、つまみで、掌に乗せたる、蒼きひかり裏すきて、眞白なる手の指のあひだの見すくまで、太くも渠は瘦せたるかな。

「上げませうか。」

と呼びかけて、手をさしのべたる、袖の下に、わがからだ立寄る時、彼の君のぞくやうに俯向きたれば、はらはらと後毛溢れて二度ばかり冷かなる雫落ちぬ。胸に抱緊められたる時は、冷たさ骨髓にとほりつゝ、身は氷とや化すらむと、わが手足思はずふるひぬ。

「坊や、いくツだえ。」

「なゝツ」と呼吸の下に答へし身の、こはそもいかなることぞと、予は人心地もあらざりき。

「名は。」とまた問ひつゞけぬ。

予は幽に答へ得たり。

「あゝ、みねさん、みいちゃんだねえ。」

「えゝ、」

かくて予を抱ける右の手に力を籠め、

「もうこんな處へ来るんぢやありません、母様がお案じだらうに、はやくおかへり。」

といふはしに衝とすりぬけて身をひきぬ。

「入れものはあるかい、」

と姫は此方に寄り添ひつゝ、予が手にさげたる螢籠の小さき口にあてがひて、彼の螢を入れむとして、軽くいきかけて吹き込みしが、空へそれて、潑と立ちて、梢を籠めて螢は飛びたり。

「あれ、」

と空を見上みあげたる、ぬれ髪は背にあふりて、兩の肩に亂れかゝりぬ。

「取つても可いかい、取つても可いんなら私がとらうや。」

笹の葉は一束結附けたる竹棹を持ちたれば、直に瀑におし浸して、空ざまに打掉るにぞ、小雨の如くはらはらと葉末を鳴して打散りたる、螢は岩陰にかくれ去りき。

やがて地藏の肩に見えぬ。枝のあたりをすいと飛びたり。また葉裏をぞつたひたる。

小石の際よりぱつと立ちぬ。つと瀑を横ぎり行く。蒼き光の見えがくれに、姫は予が前後、また右左に附添ひつ。

予はたゞ螢を捕らむとばかり、棹を打ふり打ふりて足の浮くまであくがれたる、あたり忽ち月夜となりぬ。

唯見れば舊の廣野なりき。螢狩の人幾群か、わがつれも五七人、先刻には居たりし川も見ゆれど、何時の間にか歸りけむ、影一つもあらざりき。あたりはひろびろと果見えず、草茫茫と生茂れる、野末には靄を籠めて、笠岡山朧氣なりし。

上の丘と下なる原とは、年長けてのち屢々行けど、瀑の音のみ聞きて過ぎつ。われのみならず、蓑谷は恐しき魔所なりとて、其一叢の森のなかは差覗く者もあらざるよし。優しく、貴く美しき姫のおもかげ瞳につきて、今もなつかしき心地ぞする。

「やぶちゃん注…以上で本作は終わっている。

ロケーションは泉鏡花の生地金沢をモデルの舞台としていようが、「蓑谷」や「瀧」「谷をのぼれば丘にして、舊城のありたるあとなり」や「笹川」「笠岡山」と言った地名やシークエンスに相応しい具体的な条件を満たすものは調べた限りでは全く存在しない。全体の枠組み自体が既にして不特定仮想幻界へのおぼ口であるとしてよい。

語り手「予」は既に成人している点で数え年二十四の鏡花（本名は泉鏡太郎）自身と仮定して問題ない。回想内の時制は、十七年前の少年であった主人公「予」の七歳の時の不思議な思い出として語られてあるのである。

鏡花は満十歳の時、明治一六（一八八三）年十二月二十四日、母鈴（明治三二（一八九九）年一月に出逢い、後に鏡花が娶る芸妓の本名伊藤すゞと奇しくも同じ）が次女やゑを出産後、ほどなくして産褥熱のために逝去している（享年二十八）。鏡花は幼心に強い衝撃を受け、終生、亡き母への思慕が続き、多くの作品に、その面影の変容を見出すことが出来るが、本篇もそうした要素の色濃い掌篇であると言える。作中の「予」の母も、作品内時制では、「蓑谷の螢には主ありて、みだりに人の狩るをゆるし給はず。主といふは美しき女神にておはすよし、母のつねに語り給ひぬ。」と語り、少年の台詞にも、「ねえ、

螢一ツ下さいな。母様は然ういつたけれど。あの、神様が大事にして居るんだから取っ
ちやいけないツて、さういつたけれど欲しいんだもの、一ツ位いゝでせう。」とあり、そう
して、「怪しの姫」の「もうこんな處へ来るんぢやありません、母様がお案じだらうに、
はやくおかへり。」という言い掛けによつて存命していることは判然とする。但し、現在
の「予」が母を亡くしているという事実は表立っては記されていない。しかし、最初に
引用した部分の末尾「母のつねに語り給ひぬ。」という過去完了回想の尊敬表現には、そ
れが十全に匂わせてあると読める。そう字背を読んで初めて、コーダの「貴く美しき姫
のおもかげ瞳につきて、今もなつかしき心地ぞする。」という感懐がしみじみと伝わって
くると言えるからである。

則ち、この姫はやはり、鏡花の中で実体としては失われてしまった、原型としての永遠
に若き恋人としてのエロスとしての母像（ユングの「原母」という言葉は実は私は個
人的には好きな表現ではない。が、いきなり冒頭に出現する「怪しの姫」という謂いは、確
かにそれによく適合はするとは言える）の換喩である。それは、作中に「螢は彼の君の脇
を潜りて、いま袖裏より這ひ出でつゝ、徐に其襟を這ふ時、青き光ひたひたと、ぬれま
とうたる衣を通して、眞白き乳房すきて見えたり。」という卓抜な映像によく表われてい
る。そこでは、少年は自身の魂（ひいては現在の「予」のそれ）が、螢となつて、《あく
がれいでて》いるのであり、姫の身体を這い、そうして、その乳房を透き見しているに他
ならないからである。

そうして、その少年と螢の相互変換を措定する時、終盤で、螢が螢を吹いて籠に入れよ
うとして、何故か、螢が籠に入らずに、逃げてしまい、岩陰に去るといふシークエンスが
一つの強い象徴性を帯びてくる。螢が少年であるとすれば、螢は少年Ⅱ「予」の失われた
母への永遠の思慕の記憶である。それをトラウマとして自身の心の籠に永く閉じ込めてし
まっているのが、「予」Ⅱ鏡花であるとすれば、ここで姫Ⅱ母なる存在としての広大無辺
なる自然の抱擁の中へ向かつて飛翔し去るといふのは、心傷として変形してしまつていた
亡き母への固執的な思いを、母自身が解き放つて自由にしたと言ふべきであろう。そうし
た浄化があつてこそ、エンディングの「今もなつかしき心地ぞする。」が真の清々しさを
以つて読者に迫つてくると言えるのだと私は思う。」